

## シベリアに住む

## 「幸せな少数民族たち」の息吹

筑波大学人文社会系教授 中村逸郎



## 1、ネネツ人——極北の遊牧民

## 【チュームにすむネネツ人の日常生活】

シベリアの先住民族のネネツ人、ニコライ・ラプタインデルは、真冬の時期にヤマール半島を南下する。ちょうどわたしはシベリア極北の中心都市、サレハールド市に滞在しており、買い物にきているニコライに出会った。2012年1月30日から3日間、わたしを移動式住居「チューム」に招待してくれることになった。円錐型のチュームはトナカイの皮で三重におおわれており、ニコライのあとについてチュームに入ると、空気がとても生暖かく感じられたが、気温はマイナス20度。暖かく感じたのは、外気温がマ

イナス40度だからだ。ニコライは現在、妻のウスティーニヤ、次男で19歳のイリヤ、そして6歳になる娘のヤリヤーネの4人で住んでいる。ペーチカの脇の長い椅子に腰掛けて、かれはわたしに遊牧生活の実態を披露してくれた。

「わたしは200頭のトナカイを飼育しています。ほかの遊牧民とくらべて、わたしたちのスタード（家畜の群）は小さいほうです。遊牧民の経済的な豊かさはお金やチュームの大きさではなく、スタードの規模でまります。平均的には800頭から1000頭のトナカイを飼っています。だから、わたしたちのスタードは貧しいほうです」

チュームに滞在中、わたしはとても印象深い話を聞いた。妻のウスティーニヤ

がささやいたのだ。

「わたしの母は、このチュームのなかで死んでしまいました」

うつむきながら話す彼女は、声をしばらく出しているように感じる。かれらの住むツンドラに病院がないことをわたしは知っている。それでも病名を尋ねてみた。

「わかりません。息苦しいとか、痛いとか、だるいとか、母はわたしに訴えることはありませんでした」

こういつてウスティーニヤは唇をきつく結んだ。

「母に『どうしたの』と尋ねることはありませんでした。わたしには、そのような質問が浮かんでこなかったからです。ツンドラの子にとって痛みは自然の一部であり、苦しいことではありません。死

後、わたしたちはツンドラに帰っていくだけです」  
人間の死になんの屈託もないウスティーニヤの表情はすがすがしい。死はかれらにとって敗北でないのだろう。



ネネツ人と筆者（右端）

### 【住所のないロシア国土に住む】

「ツンドラとトナカイは、ぼくの人生のすべてです」

19歳の少年は2011年9月26日、サ

レハールド市に住むネネツ人のアパートの一室で目を輝かせながら得意満面だった。かれの名前はアルチョーム・オコテートで、筋肉質の体格に精悍な顔つきが印象的だ。オコテートの生活の拠点はサレハールド市から北北東に1000キロ、カラ海に面するヤマル半島の最北端にある。

オコテートは、ネネツ人としてのアイデンティティを確立している。それでもオコテートはロシア国籍を有しているはずなので、わたしはかれにロシア政府が発行する国内向けパスポート（身分証明書）を見せてくれるように頼むと、照れ笑いをうかべた。

「このページをよく見てください。生年月日は1992年5月23日、出生地はチュメーニ州ヤマル地区ショーヤハ村と記載されています。これがぼくの出生にかんする正式なデータですが、本当のところ正確ではありません。5月23日は誕生日ではなく、村役場に出生届を提出した日なのです。じつは、生年月日も出生地もよくわからないのです」

オコテートの告白に、わたしは驚きの声をあげてしまった。

「ぼくの家族はトナカイ放牧業を営んでいて、父から聞いた話では、ぼくが生

まれてから数か月後にヤマル半島の最北端にむかう途中ショーヤハ村役場に立ち寄り、出生届けを提出したというのです。1992年5月23日という申請日が、実際の誕生日から正確に何日が経過していたのか、父はまったく記憶していません。でも、ぼくは父に感謝しています。わざわざ移動ルートからはずれて、村役場に寄ってくれたからです」

オコテートが生まれたのは、ヤマル半島の南部の冬营地だった。わたしが日常生活について質問すると、オコテートの笑顔がはじける。

「チュームには、カレンダーも時計もありません。だから正確な誕生日は特定できないので、父はぼくに『冬に生まれた』と答えるだけです。ヤマルでは、冬といっても9月にはじまり、翌年5月まで続きます。ただ自分の誕生日を知らなくても、ツンドラで生きていくにはなんの問題もありません」

オコテートの話では、家族全員の誕生日が不明であり、正確な年齢もわからない。住所を表示できない土地ははたしてロシア領土といえるのだろうか。そもそも地名のない土地を移動するネネツ人のような遊牧民を、ロシア国民とよべるのだろうか。

## 2、タタール人——西シベリアの先住民のイスラム教徒

### 【西シベリアのタタール人があゆんだ道】

西シベリアのタタール人とは、どのような人たちなのだろうか。かれらはシベリア・タタール人とよばれているが、ウラル山脈の西方に目をむけるとカザン・タタール人、ヴォルガ・タタール人、そしてロシア南部のアーストラハン・タタール人、クリミア・タタール人などが広範囲に分布し、それぞれの地域で独自の文化や歴史を形成してきた。歴史を振り返ると、キエフ公国の滅亡後の13世紀半ばから15世紀後半にかけて、モンゴル人がシベリア南部から隣接の中央アジア地域、さらにはロシア南部にかけて支配し、キプチャーク・ハーン国を建設した。域内のウズベク人、カザフ人、キルギス人、バシキール人、さらにアゼルバイジャン人、トルコ人がタタール人と総称され、チュールク系諸民族の最大のグループをなした。

ロシア正教会が本格的に浸透する18世紀に先立って、イスラム教がシベリアに流布していたことである。シベリアでイスラム教が優勢だったのとは対照的に、

ロシア・ヨーロッパ地域ではピョートル1世が近代化に着手した1721年、ロシアは正教国家へと変質していく。ロシアの宗教分布を俯瞰すると、イスラム教とロシア正教会に二分された。この構図を解消するために、エカチェリーナ2世はイスラム教徒への懐柔策を模索し、1788年9月22日、ウラル山脈の西方のウファール（現在のバシコルトスタン共和国の首都）に「オレンブルク・イスラム宗務局」を開設する勅令を発表した。宗務局はイスラム教徒を束ね、この統一組織をとおしてイスラム教徒は既存の体制に組み入れられたのである。

1917年のロシア革命後、ロシア正教会が迫害されるのとは逆に、ボリシェヴィキ政権は一時的にイスラム教徒にむけて社会主義国家建設への参加を訴えた。しかし第2次世界大戦が勃発すると、スターリンは祖国防衛を最優先課題にすえてロシア正教徒だけではなくイスラム教徒にも協力を求めた。世界大戦で精神的な打撃をうけたイスラム教徒が、宗教に救済をもとめたという背景があるにせよ、社会主義思想の欠陥が露呈してしまった。

### 【多民族共存のなかでのタタール民族教育】

わたしが2014年5月のチュメニ市に滞在中、近郊のカザーロヴォ村に向

かった。煌びやかなモスクが村のランドマークになっており、徒歩で3分ばかりの近距離に初等教育学校を見つけた。児童数251人が10クラスにわかれて学び、女性の校長アレヴティナ・ヤークシアは手狭な校長室に招きいれてくれた。

「3年まえに新しいモスクが完成したので、古いモスクは学校に改築されました。わたしたちは別のところから移転してきたのですが、1898年に建設された宗教施設ですので、まだ改善が必要な箇所がたくさんあります」

建物はモスクの原形をとどめており、ミナレットが設置されていたところもすぐにわかる。ヤークシアは、カザーロヴォ村に20年まえに移り住んだ。父親はタタール人、母親はロシア人で、イスラム文化とロシア文化の混在する家庭環境で育ち、ロシア語とタタール語の両方を習得していることが自慢だ。

「現在、11の民族の児童たちがいっしょに学んでいます。もっとも多いのはタタール人で、全児童数の87パーセントを占めています。残りの13パーセントはロシア人、ベラルーシ人、ウクライナ人、アゼルバイジャン人、グルジア人、タバラサン人、タジク人、ウズベク人、キルギス人です。ここは、まさに多民族が混在する

インターナショナルの教育施設です」

学校でロシア語を強制していると両親から抗議をうけたり、授業を拒否したりする児童はいないと微笑む。12人の教員は全員がタタール人だが、ロシア語で教えることに問題はないようだ。休憩時間中に廊下でふざける児童たちに尋ねると、かれらは異口同音にロシア語とタタール語のほかにもたくさんの言語を話すことができるとはしゃぎ声をあげる。タタール人の男児はロシア語にくわえて、アゼルバイジャン語もウズベク語も知っていると言顔をふりまいた。

「ぼくたちの学校ではたくさんさんの言語が飛びかっけていて、遊びのなかで他言語を学びます。最低でも4つの言語で会話できるから、いろいろな民族の友だちと仲良くできます。ただ会話が中心なので、ロシア語とタタール語以外の言語で作文を書いたり、小説を読んだりするのは苦手です」

### 3、トゥヴァー人——ロシア最大の幸福者

#### 【ロシア人にとって未知の地】

2013年4月25日に公表された世論調査によれば、トゥヴァー共和国の人び

との幸福度がロシア全土でもっとも高く、86パーセントに達したのだ。18歳から24歳までに限れば、92パーセントまでのびた。モンゴルと国境を接し、ステップが広がる不毛地帯のトゥヴァーの人口は31万1761人。幸福度が驚異的に高いのと対照的に、ロシア国内で経済的にもっとも貧しく、犯罪率も高い地域の一つと考えられている。生活が苦しいはずなのに、なぜ幸福度は世界でトップクラスの水準にあるのだろうか。

モスクワからクズィールに乗りいれている航空会社はなく、シベリアの周辺都市をむすぶ鉄道も整備されていない。陸路ではクズィールの北700キロに位置するクラスノヤールスクとのあいだに毎日3便の乗り合いタクシーが定期的に運行されており、所要時間は14時間55分。ただ、狭い道で山岳地帯を越えるので、夜行便に乘車するには危険への覚悟がもとめられるらしい。

空路となれば、2014年末まではイルクーツクからソ連製のプロペラ機が週3便ほど運航されていた。2014年9月3日午前11時20分に出発するイラエーロ航空に搭乗し、北西にむけて飛び機内からは、右手にバイカル湖からブラーツク貯水池に流れるアンガラ川が見える。

1時間半ほど飛行すると、機体は左側に大きく傾き、南下をはじめた。トゥヴァー共和国とシベリアの中心都市クラスノヤールスクのあいだに壁のようにたちはだかる西サヤーン山脈が見えてくる。2500メートル級の山々の岩肌が窓のすぐそばにせまった。

山脈を越えると、こんどは眼下に褐色のステップが広がる。イルクーツク郊外の温潤な森林地帯が陽光をあびて映しだす深緑の輝きとはまったく異なる風景だ。基本的に植物の自生は可能のようだが、乾燥気候のために大きく成長できない。

#### 【トゥヴァー人とロシア人】

トゥヴァーの民族構成を見ると、チュルク語族のトゥヴァー人が人口の82パーセントを占めている。つぎに多いのはロシア人の16パーセント、残りの4パーセントはハカシ人、タタール人、ウクライナ人、アルメニア人、キルギス人、ブリヤート人とつづく。ロシア全土でロシア人の占める割合は79・8パーセントなので、トゥヴァーはロシア国内にあってロシア人が極端にすくない地域といえる。クズィール市内で出会ったロシア人の男性は路上で、こう耳打ちした。

「トゥヴァー人は、『不可解な人たち』だよ。ロシア語を話せない人たちがいて、

文化も風習も宗教もちがう。ロシア人とくらべて鼻は低くて顔は丸い。だから孫は『つぶれた顔』のようだといっている。トゥヴァー人とのあいだには適当な距離感が大切だよ」

では、トゥヴァー人はロシア人をどのように思っているのだろうか。エールベーク集落で、こどもを抱える日焼けした30歳の女性はあからさまに揶揄する。

「両親から聞いた話ですが、ソ連時代にわたしたちの集落の近くに鉱山がありました。ここにソ連各地からロシア人が労働者として送りこまれてきましたが、ソ連邦崩壊後に全員が去っていきました。両親の世代はロシア人を『役立たず』と蔑んだり、ときには『雑草』と揶揄したり、野山に自生する『ニガヨモギ』のような奴らだと非難することもあったようです」

ニガヨモギはトゥヴァーの南部に分布し、独特の苦みがある。流入するロシア人はトゥヴァー人にとって、周囲の山々の自然環境を壊す苦々しい存在だったらしい。このように互いに感情的な違和感をいだくトゥヴァー人、ロシア人もおり、1990年5月から6月にかけて7つの村で一時的に対立が先鋭化したのが、その後はすっかり沈静化している。個人的な

思いは十分に抑制されているように感じられ、わたしの知るかぎりではトゥヴァー民族主義者もロシア民族主義者もほとんどいないようだ。

#### 4、グリーンドル人——ヨーロッパからの流浪の民

【まるで涙のように透明なウオッカ！】

真っ赤に日焼けした顔の48歳の男性ミハイール・ギリジェブラントが、足元から自慢の密造酒をとりだし、わたしのグラスについだ。グラスをすこし揺らすと、ウオッカは粘液状にとろりとする。不純物を一切添加していないと、得意顔だ。

2013年7月30日、8人の男女がミハイールの家にあつまり、わたしを囲んで夕食のテーブルについた。30歳代から60歳代の似たような顔がならんでいるのは、全員が親戚関係にあるからだ。

かれの自宅はシベリア南部の広大無辺な密林地帯のなかのダグニークという集落にある。周囲には親戚の15軒の家屋が肩を寄せ合うかのようにならび、日用品を販売する商店や郵便局、役場、さらには病院などの公共施設も存在しない。水道管もガス管も電線も敷設されておらず、電気は自家発電だ。

ミハイールにかれのルーツを尋ねると、満面に誇らしげな様子をうかべてこたえた。

「自分のことをドイツ人だともっています。先祖はドイツの出身で、ギリジェブラントというファミリー・ネームはドイツ人のものです」

「いやいや、……」  
狩猟生活をいとむ瘦せた40歳の男性が、ミハイールの自説に噛みつく。

「わたしたちはポーランド人だよ。祖父母たちはポーランド語を話し、わたしたちの文化の起源はポーランドにあります」

この男性の妻が、口をとがらせる。  
「わたしたちはロシアで生まれたのだから、ロシア人だよ」

全員のファミリー・ネームがギリジェブラントで、親戚関係だというのに、ドイツ人と名乗る男性もいれば、ポーランド人だと言い張るひともいる。さらには、ロシア人だと断言する女性。わたしがかれらの発言に当惑していると、63歳のヴラジーミルが議論をおさめる。

「わたしたちは、グリーンドル人です。正確に言えば民族名ではなく、先祖が住んでいた地名に由来します。わたしたちの集落は小さな独立国家で、プーチン大

統領の手も届かないほど遠いところで暮らしています。この地には近代技術も産業もないけれども、自給自足の生活に満足しています」

ダグニーク集落は、「シベリア・タイガー」という海原のなかにうかぶ孤島」であって、大自然が外界から人びとを遮断しているがゆえに、「小さな独立国家」と高らかに宣言しているように響く。

### 【ヨーロッパからシベリアへ】

どのような経緯でかれらはシベリアに移住したのだろうか。テーブルを囲むグリーンドル人に尋ねると「先祖はもともとブーク川沿いに住んでいた」と過去をたどる。この川は、現在のベラルーシとポーランドの国境にそって南から北に流れ、ワルシャワの北側をぬけてビスワ川に合流する。ミハイールが祖父母から伝え聞いた話はこうだ。

「17世紀初頭、ラファエリ・レシーンスキーというポーランドの伯爵がいました。かれはブーク川流域に広がる領地を『ブースキー』とよび、ここに入植させたひとたちを『グリーンドル人』と命名しました」

かれらは故郷を訪れたことがなく、ブーク川流域といっても具体的な場所を知らない。ミハイールがむかし耳にした話で

は、先祖は伯爵の領地に移住するまえ、ポーランド・リトアニア共和国の各地を放浪していたらしい。この共和国は1569年に誕生し、1795年のポーランド第3回分割まで200年間存続した。オスマン帝国につぐ広大な領土を有するようになった国家は、さまざまな民族、複数の言語や文化、宗派を内包していた。その後、ポーランド領土はプロイセン、オーストリア、ロシアの3国に分割され、グリーンドル人が住んでいた地域はロシアのヴォロニーヤ県に編入された。1904年のストルイピン農業改革で農民は自由意思で農村共同体から離脱できるようになり、しかも土地を私有化できる権利が付与された。ロシア社会の様相はおおきく変わり、グリーンドル人の運命も転換期をむかえる。土地をもとめてヨーロッパ・ロシア地域からシベリアへと移住した。

### 【複雑な言語と信仰】

わたしが宿泊した家の夫アレクセイと妻エレーナがときどき、耳慣れない言語で会話するのに気づいた。わたしはかれらとロシア語で会話しているが、夫婦だけでかわすことばはアクセントがくる音節がロシア語よりも不明瞭で、語調が柔らかに感じられる。夫婦に使用言語を

尋ねた。

「わたしたちは、ひとつの言語で会話しているわけではありません。ロシア語を話すことができますが、あわせてウクライナ語とベラルーシ語の訛りが入っています。ときには、ポーランド語とドイツ語も加わります。ただ意識的に言語を選んで使っているのではなく、ごっちゃ混ぜです。グリーンドル語と名づけるのがたまたまのかもしれない」

5つの言語をより糸のように絡みあわせて独自の言語を編んでいるが、エレーナは多言語を使用していると意識したことはないと正直だ。エレーナはわたしを夫婦の部屋に案内してくれた。片隅に据えられた棚のなかから古書を取りだして、差し出した。表紙をめくったページの下に、発行年が1905年と印字されている。

「この書物は、『祈祷書』です。各家庭に備えられており、『聖書』と名づける家もあります。呼称がちがっても、中身はポーランドの聖人サムイル・ドームプロフスキーの説教集で、ポーランド語で書かれています」

祈祷書には神に捧げることが綴られており、グリーンドル人がポーランド語でお祈りしていることに驚くと、エレーナは最初のページから読み聞かせてくれ

た。わたしが到着した翌日、アレクセイとエレーナは祈禱のためにグレインドル人が集まる建物に案内してくれた。1912年に移住してきたギームボルク家の旧邸だ。客間に配置された丸テーブルのうえに、高さが40センチほどの十字架がのっている。「テーブルを囲んで出席者が祈禱書を朗読しています」とアレクセイは表情をひきしめる。グレインドル人は祈禱書を朗読しながら、テーブルの十字架に向きあう。神につつしんで仕える敬虔な祈りに徹し、神を深く敬っている様子がみてとれる。祈禱書はポーランド語でかかれたカトリック教のものなのに、かれらはカトリックに抗するプロテスタント教徒だというのだ。エレーナが話題を奇妙な話に転じた。

「じつはわたしたちの集落に月に1度、イルクーツクからカトリック教会の司祭が訪れ、いっしょに祈禱しています」

それにしてもルーテル教徒がカトリック教会の神父とともに祈禱するのは、不可解な光景で、常識をひっくり返すほどの衝撃にわたしは驚愕した。

## 5、シベリアらしい多様性を受容するチター市

### 【第二のエルサレム】

「チター市はあなたを歓迎します。こは、『第二のエルサレム』の地です」

わたしを空港で出迎えてくれたヴァジーム・ナルイーシキンは、こう語りかけてきた。2014年10月2日夜にモスクワを離陸した飛行機は東に進路をとり、ウラル山脈を越え、バイカル湖東岸を過ぎたあたりから降下を開始した。チターは、行政区分上のシベリアと極東の境に位置する。

「チターの旧市街地にロシア正教会とイスラム教とユダヤ教の宗教施設が出現したのは、100年以上もむかしのことです。神はひとつですから、互いに近いほうがよいのです」

これら3つの宗教は「三大一神教」といわれ、三者の聖地がエルサレムのなかに点在し、複雑に絡みあっている。神のことをキリスト教では頭文字を大文字で表記し、ユダヤ教は「エホバ」、イスラム教は「アッラー」とよんで崇めている。「第二のエルサレムといっても、たがいに尊重しあい、忍耐強く共存しています。だから『宗教の寄り合い』が可能なのは、チターだけなのです」

旧チター丘陵に行ってみると、ロシア正教会はセレンギンスカヤ通り、ユダ

ヤ教のシナゴーガ（教会）はインゴジンスカヤ通り、そしてイスラム教のモスクはアノーヒン通りにあり、半径300メートル以内と本当に近い距離にある。

これらの建物はロシア帝政時代に建立されており、プーチン政権下でキリスト教プロテスタント系のバプテスト教会も加わった。いったん旧チター丘陵をはなれて市内を散歩すると、仏教寺院やローマ・カトリック教会、保守的なプロテスタント系に色分けされる福音協会など30棟を数える宗教施設が目にとまる。じつは、多宗教の施設が乱立している光景はチターにかぎったことではない。シベリア各地を旅行すると、トームスク、オームスク、イルクーツクの各都市でも街角で思いがけずめぐり合う。

わたしは10月5日、ユダヤ教のシナゴーガでグリゴリー・エレミンと面会した。35歳のかれは、突然の訪問にあわてた様子だ。1907年に建築された4階建の石造りのシナゴーガは、外壁の一部がはがれ落ちてしまっているが、壮麗な装飾は周囲の目をひく。チター市内にユダヤ教徒が最初に到来したのは1826年で、大半は流刑囚だった。かれらを追って1851年以降におおくのユダヤ教徒がバイカル湖の周辺地から押しよせ、20

世紀前半にチターの経済発展に貢献したようだ。

現在、ロシア全土に23万人のユダヤ教徒が住んでいるといわれているが、ソ連邦崩壊時にイスラエルへ出国し、その後ロシアに帰還したひともあり、正確な人数は不明だ。旧チター丘陵に3つの宗教施設があることに話題をふると、エレミンはかすかな笑みを浮かべた。

「ユダヤ教徒のなかにロシア正教会やイスラム寺院、さらには仏教寺院に通っている信者がいます。でも、わたしたちは禁止しておらず、実態はわかりません」

## 【2つ目の宗教としての仏教】

わたしはシナゴーガを訪問した足で、イスラム寺院に向かった。西シベリアでなんども見かけた威風堂々としたモスクとくらべて、控えめな造りだ。29歳のリマート・サイダーメフが近づいてきた。シナゴーガからの帰り道であることを正直に話すと、かれは握手を求めてきた。「わたしはイスラム教徒ですが、シナゴーガと仏教寺院を訪問しています。シナゴーガはすぐ隣にありますので、ユダヤ教徒と挨拶をかわすうちに親しくなりました。友人のなかに仏教徒が結構たくさんおり、2010年に完成したチター・ダツァーン（仏教寺院）に誘われます。

あす高位の僧が来るという知らせを受けとりましたので、かならず行きます。仏教の教義についてあまり知らないのですが、気に入っているラマ僧がいて、面会するのがたのしみです。ただロシア正教会は嫌いというわけではありませんが、関心がありません」

サイダーメフは、キリスト教よりも仏教に親近感をいだくイスラム教徒が多いとこぼす。サイダーメフが訪れるチター・ダツァーンは、市の中心地から北に3キロの小高い丘にそびえている。本殿を囲むように3棟のちいさな家屋が建っており、その1つひとつでラマ僧が住民と面会している。わたしが10月9日に寺院を訪問すると、人気の高いラマ僧の家屋の玄関には10人ほどがベンチに座って順番を待っていた。かれらのなかにロシア正教徒であることを明かすひとがいた。

旧チター丘陵では3つの宗教が寄りあっているとききしるしたが、じつはロシア正教徒、ユダヤ教徒、イスラム教徒に共通するのは仏教が2つ目の宗教として人気が高いということである。仏教はシベリア土着のシャマニズムと融合しながら根をはり、ラマ僧が来訪者に積極的な声をかける。さらに近年、ロシアが外交政策でアジア志向に転じていることも、

仏教の地位をおしあげている。

（2016年9月29日・公開フォーラム）

## 著者略歴（なかむら いづろう）

1956年島根県生まれ。学習院大学大学院政治学研究科博士後期課程単位取得退学、モスクワ国立大学、ロシア科学アカデミー国家と法研究所留学、島根県立大学総合政策学部助教を経て、現在筑波大学人文社会系教授、東京大学教養学部後期課程非常勤講師。著者『東京発モスクワ秘密文書』（新潮社、1995年）、『ロシア市民―体制転換を生きる』（岩波新書、1999年）、『帝政民主主義国家ロシア―プーチンの時代』（岩波書店、2005年）、『虚栄の帝国ロシア 闇に消える「黒い」外国人たち』（岩波書店、2007年）、『ロシアはどこに行くのか タンDEM型デモクラシーの限界』（講談社現代新書、2008年）、『ろくでなしのロシア プーチンとロシア正教』（講談社、2013年）、『シベリア最深紀行 知られざる大地への七つの旅』（岩波書店、2016年）